

「路上と広場—〈マダン〉から眺める東アジアの現在」 開催報告

2010年9月12日(日) 13:30~16:30

於 京都府民総合交流プラザ(京都テルサ) 第1セミナー室

主催 * 研究班「東アジアのストリートの現在」

● プログラム ●

=第1報告=

「(民族)民衆文化運動」と「民族まつり」の間で—「東九条マダン」を見る視覚の考察—

山口健一(京都大学大学院GCOEプログラム研究員)

=第2報告=

「韓国社会におけるマダン」

水谷清佳(東京成徳大学専任講師)

=コメンテーター=

稲津秀樹(関西学院大学社会学研究科博士後期課程)

● 研究会参加者の感想・コメント ●

第11回研究会は、「路上と広場—〈マダン〉から眺める東アジアの現在」と題して行われた。この研究会を開催するにあたり、主催者側(報告者)が設定した目的は以下のような内容であった。

今回は、わたしたちが、「路上」あるいは「広場」と何気なく呼称している社会的な空間／場のあらわれについて、韓国、そして、在日コリアンの人びとにとっての「マダン」なる実践に着目する。マダンはハングルで辞書的には「広場」あるいは「庭」と訳される語である。日本においては、これを伝統回帰的な意味と共にローカルな実践に接続させつつ、1980年代以降、在日の人びとにとっての文化を通じた政治実践、あるいは自己回復運動の一環としてあらわれた。一方、現代韓国社会ではストリート・パフォーマンスが行われるところとしても「マダン」が存在するといわれる。ここに、ストリートなるものの実態／概念を、東アジア(日韓)規模で考えていく際の、大きなヒントが隠されているように思える。

このように「マダン」を事例としつつ、日韓にまたがった「ストリート」的な実践をつなぐものを明らかにしようとしたのが、この研究会の目的であった。当日は、こうした主旨説明を報告者から行った後、山口健一氏（京都大学大学院 GCOE 研究員）と水谷清佳氏（東京成徳大学助教）からそれぞれご報告いただいた。以下、各報告の要約を行った後、報告者の雑感を述べてみたい。



I 各報告の要約

山口氏には、『(民族) 民衆文化運動』と『民族まつり』の間で『東九条マダン』を見る視覚の模索』という題の下、ご報告頂いた。京都における「東九条マダン」の実践紹介に加えて、この背景を論じる上で欠かせない、在日コリアンたちによる「マダン劇」の輸入と、その一展開としての「マダン」(民族まつり)を位置付けるものだった。

彼によれば、韓国におけるマダン劇は、1970年代頃からの軍事政権に対する民主化運動の際の民衆による抵抗／人間性の回復を示していた。これを1980年代頃より日本に輸入したのが、在日コリアンの民族的アイデンティティを回復する文化運動(民族まつり)にかかわるアクターらであった。その上で、東九条の実践での前身となったマダン劇集団「ハンマダン」の活動と現在の「東九条マダン」の取り組みを紹介する過程で、いまま活動を続ける両者の連続性と不連続性を把握していくことの重要性を指摘された。

一方、水谷氏には、韓国における「マダン」の語用法の紹介から議論を展開された。彼女によれば、「マダン」なるものは、それが指す「大きさと場所」／「利用者及び対象」／

「利用方法」／「意味」によって多様な用いられ方をしており、韓国社会固有の文脈に沿って生じてきた独特の空間的概念であるという。そしてその概念の社会的な普及を考える上で避けて通れないのが、山口氏の指摘と同じく、70年代から80年代にかけてのソウル大学校を中心とした仮面劇集団の文化実践であったという。発足当時こそ、大学キャンパスなど屋外で仮面劇公演を行っていたが、その後、政府による公演法改正の動きや後段の政府による都市空間整備もあり、徐々にその活動が屋内施設（教会・講堂・劇場）などで行われるようになったという。

80年代に入るとソウルオリンピック開催を背景にしつつ、政府の文化政策の中に「マダン」が取り入れられ、都市空間の整備が進むことになった。その具体的な発露が、外国人観光客を対象に伝統文化を披露する「ソウルノリマダン」(84年～)であり、ソウル市民の文化空間として整備された、「大学路(テハンノ)『車のない路』風流マダン」(85~89年)であった。特に後者は毎週末に歩行者天国となると共に、軍事政権下のソウルにあって若者を中心に「自由」なスタイルを謳歌できる場となった。この時、多くの演劇場が生まれたことに加え、数々の芸術家やパフォーマーが集まりだしたという。しかし、徐々に若者の逸脱が問題化され、89年には「工事のための迂回路のために道を使う」という名目の下に閉鎖されることとなったという。

だが、この時集まった人びとたちは、大学路閉鎖後も散開せず、民主化以降の大学路再開後のパフォーマンスを支える担い手となった。彼らの大学路という空間に対する認識は、この「車のない路」時代の経験を参照することによって構成されており、水谷氏はこの時の調査において、ストリート・ミュージシャンたちと観客が織りなす相互作用に、都市における「マダン」なるものを見出している。とはいえ、2004年以降の現在、この大学路は政府による「文化地区指定」を受け、財団法人によるアーティストの事前選別が行われるようになっていった(ソウルアーティスト制度)。それにより、当該空間におけるパフォーマーも変化を余儀なくされ、彼女が見出した「マダン」的なものは、再び政府による管理・規制に晒され、その意味を失いつつあるという。

II 主催者側の意図せざる結果―「国際発信の場」が生まれる瞬間

これらを受けながら報告者が考えていたのは、現在、日本における「マダン」なる実践が学校や公園などで開催される際に、調査者の写真や報道などによって切り取られる「マダン」イメージの「流用先」が、韓国におけるどういった取り組みにあったのか、ということだった。

阪神間の「マダン」実践の場を歩いた筆者にとってみれば、それはチョゴリを着た人びとによるチャング(農楽)演奏や、それらが列になり、ぐるりと円(丸)をなしている場面が頭の中に象徴的なものとしてあった。そうした「イメージ」に最も合致したように思えたのが、水谷氏の報告にあった(大学路に関する写真ではなく)軍事政府下で整備された経緯を持つ「ソウルノリマダン」での伝統文化が披露される写真であった。これは言い

換えると、民衆レベルにおいて登場した「マダン劇」とその大学路での展開に対して、軍事政府下の観光資源としてのナショナルな伝統文化を披露する場としての「マダン」があり、日本の「マダン」実践にかかわるイメージが、前者よりも後者により親和性があるのではないか、という仮説であった。それによって、人びとの移住過程に併せて生じるこうした「ナショナリズム」の移住プロセスをどのように考えればよいただろうか、という問いかけを議論において行ったのだった。

この仮説的な問いは、冒頭に提示した「マダン」という名で展開するストリート的な実践において、日韓のあいだで文化が越境していくプロセスに介在する問題を具体的に探求していくために発したものだ。実際、この問いをめぐるのは、当の実践における母国のナショナリズムとの親和性を判断するのは、具体的にそれが「どこ」で行われるのかにもよるのではないか（韓国か日本か）、という議論に展開していった。

だが、こうした「主催者的に狙っていた問いかけ」や論調に対し、「そうは言うけど、本当にこの（ソウルノリマダン）のイメージで日本のマダン劇やマダンの実践がはじめられたのかな？」と、もっとも鋭い批判を投げかけてくれた人物がいた。それは、当日会場にいらしていた「ハンマダン」に所属するコリア系の実践者であった。彼女の問いかけに対し、わたし自身は、東九条マダンと阪神間でのマダンで違いもあるのではないかと、四苦八苦した応答しかできなかつた覚えがあるが、わたしの話に、規定路線的な議論を狙った「うさんくささ」があったからこそ、当事者による上のようなレスポンスがあったのかもしれない。また、仮説的な問いとはいえ、議論のために根拠がややあいまいな意見を提出してしまったことは、この場を借りて反省したい点である。

彼女の積極的な声により、その後の議論展開は、冒頭の主催者が設定した問いをはなれていくこととなった。むしろ、続いて山口氏より提出されたのは、ストリート班が想定する「ストリート」なるもの、そのものへの疑問であった。そのため、今回の研究会は、ストリートの実践が日韓のあいだを移動する過程そのものに孕む問題、ひいては「東アジアの現在」を明確にすることは結果としてできなかつた点で、当座の目的からすれば、この研究会は、ある意味で「失敗」したといえよう。

だが、彼女の問いかけをきっかけに、当初の「問いだて」が極めて甘かつたことを痛感させられたと共に、この問いを今後も深化していくためのきっかけが与えられたと思う。そればかりか、前回研究会（第10回）に続いて行われた、インフォーマント／当事者の（意図せざる）参加は、以前報告者自身が考えていた、以下のような「国際発信の場」をはかrazも実現してくれたように思われるのだ。

.....在日外国人（エスニシティ）研究を志す者にとって、在日する当事者たちに研究者のフィールド調査の成果を紹介するのみならず、その「成果」について語り合えるような場を「日本国内」において考えることも、ひとつの「国際発信」の場の可能性を示

していると言えないだろうか。……今後、「国際発信」の場そのものを、学者に限定されたものから解放していく可能性も含めた議論も行うことは、本 GP プログラムの課題として掲げられた、「社会の幸福」について、アカデミックな視点のみならず、実践的にも考えていく上で、重要なことではないかと思われる（稲津秀樹,2010「国際発信の場の〈限定性〉／からの〈可能性〉について」『KG/GP 社会学批評』(3) p. 65)。

更に、上の出来事から、こうした「国際発信の場」は、いわば主催者が「狙って」行うべきではなく、あくまでも主催者側の意図をよい意味で「裏切ってくれる」存在や「問いかけ」による「反駁」にさらされることが重要なのだと痛感させられた。なぜなら、ペルーレストランを舞台に、上のような「国際発信」を（せこい意味で）「狙って」開催した前回研究会では、主催者側の意図や主張に対し、根本的な疑問が提出されるような問いかけや議論は、今回に比べて生まれなかったように思えるからに他ならない（よくよく振り返れば、前回研究会の場を提供する側のペルー系のオーナーたちにとって、われわれは「お客さん」だった!）。

よって、今回の研究会の開催を通じて、報告者にとって最も「痛く」、同時に「実りのある」出来事だったと思えるのは、主催者側である私たちにとっては、全く意図せざるかたちでもって、こうした「国際発信の場」が生成する瞬間に立ち会えたことであった。

Ⅲ 「ストリート」を”誰”と語るのか?—現場に開き続ける「ストリート」の探求者であるために

私たちストリート班は、大学院 GP の期間、約 2 年間に渡って研究会活動を行ってきた。また、後半の 1 年間は、報告者自身が中心となり、研究会を幾つか開催する機会に恵まれた。だが、「ストリート」を論じたり、考えたりする知らず知らずのあいだに、「ストリート」とはこういうものなのだ、あるいは、これこそが「ストリート」をめぐる問いかけなのだ、といったように、規定路線に従った議論を徐々にだが想定しはじめていたのではないだろうか、という疑念は消えない。

ある現象をめぐる、それは〇〇なのです、といった明快な説明を与えること、あるいは、〇〇なのではないか、といった仮説を提出することは、社会学者たろうとするものにとって必然的に要求される能力（ソシオリテラシー!?!）であろう。報告者自身はこうした説明や問いをまったく否定する立場ではない。だが今回の研究会がわたしたちにもたらしてくれたのは、そうした「ストリート」をめぐる説明や問いかけが、いったい誰と誰との間でなされているのか、という「社会学的な知」の生成をめぐる根本的な懐疑であった。

「ストリート」を論じながらも、学者同士の話の中で「自然に」生成されていくリアリティがどこかで現場の実践者や市井の人びとから「ズレ」たものになっている。こうした現状が報告者にとって重要なのは、こうした「ズレ」の存在自体や、ズレの一致を目指そ

うとすることではない。むしろ、そうした「ズレ」を「ズレ」として認識できたり、話し合っていけるような場へと、わたしたち自身が開いていく態度を持ち続けていけるかである。それ如何によって、「ストリート」は学者による一義的な定義を許さない動的な概念となっていく可能性もあれば、何かしらの総括とともに静観的な理解しか許さない概念となるかもしれない。

「ストリート」を語ることは、単に路上における現象や人びとの動態を「客観的」な位置から眺めたり語ったりすることではない。「ストリート」の現在を考えるためには、ストリートを探究する者たち自身が、「誰」との関わりの中で考え・語りあうのが決定的に重要なのであって、所与の「現象」や「説明」のみから考えられるものではないのだ。

だが、現場との「対話」は、主催者側によって一方的に用意されるべきものではない、ということも今回の研究会から教えられた困難な事実である。むしろ、用意された「対話」を称揚するような過ちを犯せば、上の意味での「ストリート」からは遠ざかっていく結果しかもたらさないだろう。

はたして、ストリートを探究する私たちは「誰と出会い／交わり／繋がって」くる中から「ストリート」について語ってきたのだろうか？ GP 期間中のストリート研究を総括する時期にあって、安易に総括してはならない「課題」を与えてくれたのが、今回の研究会であったと思える。改めて、本研究班に大きな「問いかけ」を与えて下さったゲストの方々と「ハンマダン」の方をはじめ、参加者の方々に感謝申し上げる次第である。

■ 稲津 秀樹 (博士課程後期課程/日本学術振興会)

私自身は京都に在住しており、山口さんの報告事例となっていた東九条マダンは7-8年前にいちどだけ覗いたことがある。ソウルは訪れたいと思いつつまだその機会がない。日本国内や韓国でのマダンの歴史的背景も知らず、研究者がそれをどのように見るのかということに関しても、あまり知らなかった。

たしかに、歴史を学び、祝祭のおこなわれる社会的文脈などをつぶさ調査すれば、いま実践されているマダンというものをそれなりに位置づけることができる。そしてそれは研究として必要不可欠な作業だ。だけど、ほんとうに期待したいのは、こうしたイベントに対する行政や研究者、そして当事者によってあたえられる位置づけをつねにどこかではみ出しながら遂行されていく実践の効果の記述だ。当事者もふくめ、誰の位置づけも分析・解釈のさいに特権化することなく、現在進行形の場と関係の生成・変化をみていくこと。そもそも「実践 (practice)」を記述・分析することとはそういうものだろう。お二方の報告とも、この課題と格闘しておられるのだと思う。

この研究会は私にとって「マダン入門」でもあり、同時に「マダンを開く」考察の糸口を与えられもした、とても刺激的な集まりだった。研究科以後のイクスカーション、懇親会会場の選定もふくめ、参加者のみなさんにはたいへんお世話になりました。ありがとう

ございました。

■ 白石 壮一郎 (大学院 GP 特任助教)